きょうだい保育を導入した保育園の子どもの発達に関する調査研究

—「いえ」型保育空間における子どもの集団形成について—

主査　粟原　知子*1
委員　小山　逸子*2，　福地　真美*3

本研究は，「いえ」型保育空間（台所を有する食寝分離の空間）で「きょうだい保育（1～5歳児での異年齢保育）」を行うK保育園の子どもの生活実態を把握し、その有効性を検証するものである。「総括資料の分析」「保育室内での行動観察調査」「保護者に対するアンケート調査」を実施し、開設からの保育方針の変遷・保育士の意識変化、保育室内での子どもの居場所と集団構成、家庭での生活について分析を行った。その結果、①園の保育方針によって子どもの生活スタイルが変化すること、②生活行為に合わせて居室の使い分けがされること、③「生活行為」「活動」時に異年齢集団が多く発生すること、④家庭での食意識が高いことが確認できた。

キーワード：1）子ども，2）保育園，3）きょうだい保育，4）異年齢保育，5）保育プログラム，6）集団構成，7）キーワード抽出分析，8）居場所，9）行動観察，10）生活評価

THE EFFECTS OF DEVELOPMENT OF CHILDREN IN NURSERIES INTRODUCING MULTI－AGED GROUPING CHILD CARE

— The Forming Children's Group in the space of the 'Home' Style Nursery Space —

Ch. Tomoko Awahara
Mem. Itsuko Koyama, Mami Fukuchi

The effect on development of children in multi-aged grouping care facilities was investigated by analyzing the summarized observation of daily children's behavior and questionnaires to the children's families. The children stayed in a day nursery that resembled a family home with a comfortable day-room, a dining-room with an open-kitchen, and bedroom. Living- time (meal, sleeping, and program - time) was shown to be the best chance to cultivate mutual understandings in a mix - aged and development community. And during play – time, same - age groups and small mix - aged group communities were shown.

1.　研究の背景と目的

近年、女性の社会進出、核家族化、少子化の進行により保育園に対する保育要求が高まっている。働く、あるいは働かざるをえない母親の増加は乳・幼児の保育を要求し、またいじめ問題、キレる子ども等、集団教育の重要性を保育に求める声も高まりをみせている。さらに核家族での生活や、少なくなった近所づきあい等、現代の住環境の中で得にくくなった集団生活の基礎、豊かな人間関係で得られる様々な経験や知識の不足を保育に求める親も少なくはない。

そのため保育方法も多岐にわたり保育方針を選択できる環境は整いつつあるが、その保育施設計画の多くは従来の年齢別の保育室と遊戯室という２種の空間で構成されたものがほとんどである。集団形成、人間関係という点において発達を重要視した保育方針のひとつに異年齢集団で保育生活を送る「異年齢保育」が挙げられる。しかし、子どもの多様な集団形成を促す保育空間計画の選択肢はいまだに少ない。

よって本研究では、異年齢保育における子どもの発達を、子どもの多様な集団形態とそれを促す保育空間との関係から理解し、豊かな人間関係を築く保育環境とはどのようなものかを検証することを目的とする。特に本稿では、子どもが１日の大半を過ごす保育園を「いえ」と認識するK保育園を調査対象とする。「住まい」として「きょうだい保育」（ソフト）と「いえ」型の平面計画（ハード）を有するK保育園での子どもの生活実態を把握したい。

2.　調査方法

2.1　調査対象施設概要

滋賀県「K保育園」（2004年４月開設）では「異年齢保育」を「きょうだい保育」と称し、単に異年齢集団で保育生活を送るだけでなく、保育方法（ソフト）と現代の「いえ」を意識した機能分離型の保育空間（ハー

*1 福井大学大学院 工学研究科ファイバーアメニティ工学専攻　博士後期課程
*2 K保育園　園長
*3 福井大学大学院 工学研究科建築建設工学専攻　博士前期課程

ド）を結ぶ効果的な保育方針の一つとして「食環境の充実（保育室内の台所での簡単な調理と配膳）」を提案している。現在、３～５歳児（または４～５歳児）での異年齢保育が主流となる中で、「きょうだい保育[注1)]」は、１～５歳児で保育を行う点が特徴的である。１～２歳児と３～５歳児の人間関係や集団形成にも着目したい。

図 1-1 に示すように、K 保育園は０歳児用保育室１軒と、１～５歳児約２５名で１家族（異年齢集団）の保育室３軒という４軒の「保育室（おうち）」と遊戯室、屋外テラスによって構成されている。各「おうち」は「対面式キッチン付きのダイニング」、「居間」、「寝室」、「玄関」、「トイレ」を有する食寝分離型（伝統的な「田の字型」の間取り）の平面構成となっており、昼食、おやつ時には、保育士以外に調理員が来室し園児と共に「おうち」内の台所で食事の配膳を行っている。

また、各「おうち」の間取りの基本は、**図 1-2** のような構成となっているものの、現在では各「おうち」ごとに独自の家具配置を行っている。家具配置を行うことで居室内でも機能分離が進んでおり、保育空間にも個性がみられる。

2.2 調査概要

調査は以下の３種類である。

①総括資料の分析及び聞き取り調査（半年ごとに行われる保育士の総括会議資料から、保育士の意識変化と開設からの保育方針の変化を把握）

2004 年（開設）～2009 年３月まで 10 回分の資料

②園児の行動観察調査（２クラスを対象に、調査日における全園児の居場所と集団構成を把握）

第１回調査 2008 年１月の２日間

第２回調査 2008 年２月の３日間

第３回調査 2009 年５月の３日間

（１クラスのみで補足調査[注2)]）

③保護者に対するアンケート調査（園児の生活と保護者の食事意識を把握）

第１回調査 2008 年２月、第２回調査 2009 年３月

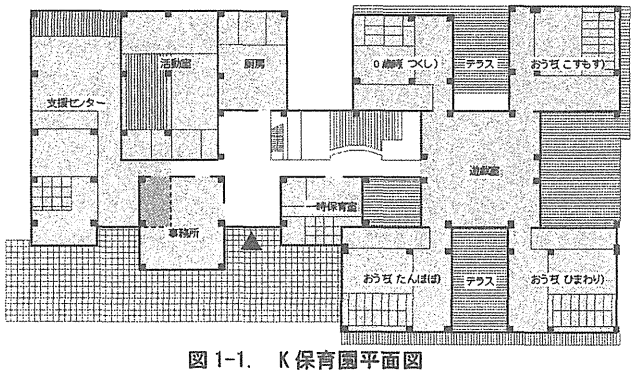


図 1-1. K 保育園平面図

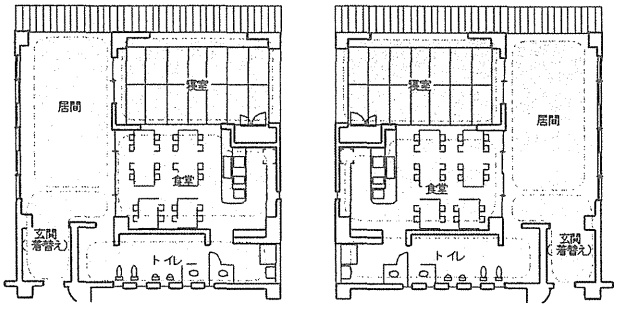


図 1-2. 「おうち」平面図

3. 資料分析及び聞き取り調査

3.1 総括資料分析の方法

2004 年（開設時）から 2009 年３月（10 回分）までの総括資料を用い、キーワード抽出分析によって保育士の意識変化を把握した。補足調査として保育士へのヒアリングを定期的に実施した。

総括資料には主に「子どもの様子」「異年齢の関わり」「年齢に応じた発達保障」「保育士の分析」「活動・取り組み」「反省・課題」等が記述されており、１～５歳児で「きょうだい保育」を実施する「ひまわり」「たんぽぽ」「こすもす」クラスのものを対象とした（園児、職員数を**表 3-1** に示す）。キーワードごとに（**表 3-2**）各記述を「子どもについて」「保育士の意識（アプローチ）」「取り組み」「食環境」「環境」「目標・課題」の６種に分類し、キーワード出現率（＝各項目／各「おうち」総括１回分のキーワード出現数）によって分析を行った。総括資料のキーワード出現数を**表 3-3** に示す。尚、１つのキーワードに複数の意味が含まれるため複数回カウントしたものもある。

3.2 総括資料にみる保育士の意識変化

1）園全体での動き（**図 3-1a**）

各「おうち」のキーワード（大分類及び中分類）出現

表 3-2. K 保育園平面図

記述項目			主要キーワード（例）
大分類	中分類	小分類	
子どもについて（子どもの発達）	問題	子ども個人	たたく、落ち着きがない、不安
		異年齢間係	間わりを持たない、無関心、けんか
		同年齢間係	仲間外れ、無関心、けんか
		保護者	不安、不満、心配、話す機会がない
	良い育ち	子ども個人	問題行動の減少、楽しむ、安心、信頼
		異年齢間係	甘える、憧れる、面倒をみる、思いやる
		同年齢間係	一緒に遊ぶ、思いやる、協力、理解、信頼
		保護者	理解、信頼、安心
保育士の意識（子どもへのアプローチ法）	間接的		見守る、自主性の尊重、待つ、促す
	直接的		声かけをする、働きかける、指示する
取り組み	日常の遊び		ごっこ遊び、ままごと、絵本、つもり遊び
	通年活動		かっぱ、リズム、おはよう（朝の会）
	行事・節句		プール、運動会、風船げ、みこし作り
	食		クッキング、食事準備の手伝い、米とぎ
食環境	良い育ち	意識改善	好き嫌いの減少、食事量の増加
		人間関係	手伝う、気遣う、思いやる
	問題		食べない、当番の放棄、遊び食べ
背景	家庭環境		家庭での保育問題、不規則な生活
	環境		保育士の変化、新入生、衣替え
目標・課題	遊び		伝承遊びを促す、イメージの共有
	環境		安心できる環境、遊びに集中できる環境
	意識		見守り、支援

表 3-1. 園児・職員数

※2008年1月現在

学年	性別	ひまわり	たんぽぽ	こすもす
1歳児	男	2	3	2
	女	3	2	2
2歳児	男	3	3	2
	女	3	3	4
3歳児	男	5	4	5
	女	1	2	1
4歳児	男	2	2	2
	女	4	4	3
5歳児	男	0	0	3
	女	4	3	1
園児合計		27	26	25
保育士		3	3	3
4Hパート		1	1	1

表 3-3. キーワード出現数

	ひまわり	たんぽぽ	こすもす
2004前期	245	133	163
2004後期	209	232	143
2005前期	246	132	236
2005後期	238	299	231
2006前期	706	372	777
2006後期	475	357	632
2007前期	603	382	518
2007後期	227	239	270
2008前期	340	329	417
2008後期	267	251	230

率を年度ごとに示したものが図 3-1 である。園が開設されたばかりの 2004 年度前期は、各「おうち」のキーワード出現率にばらつきが目立つが、2006 年度以降は着目点が統一され、2008 年度には各「おうち」でほぼ同値を示している。

大分類について、全体的に最も記述割合が高いのは「子どもについて」で２項目を合わせて 50～70%を占める。2004 年度前期は「たんぽぽ」のみ 44.4%と「良い育ち」に注目しているが、その他は「問題」点とほぼ同じ割合を示す。2005 年度以降は徐々に「問題」が減少し「良い育ち」の記述が 40～50%まで増加している。

保育士の子どもに対する「アプローチ」方法については、常に 10%以下と着目度が低い。初年度から徐々に減少し 2006 年度はほとんど触れられていないが、2007 年度からわずかながら上昇しはじめている。

「取り組み」については、初年度の 10%前後から 2005 年度に「たんぽぽ」の記述が 30%を示し、2006 年度からは他クラスも「取り組み」が 20～30%に上昇している。各「おうち」ごとの活動を重視し始めた 2007 年度にはそれぞれ独自の「取り組み」に力を入れ、記述が大幅に増加するが 2008 年度には 20%前後に減少した。

「食環境」については、全体的に 10%以下と着目度が低い。初年度前期に「たんぽぽ」が 15.8%と「良い育ち」に着目しているがその後減少し、2005 年度後期にわずかながら全クラスで増加している。

「環境」については、全体的に 10%以下と着目度が低い。2005 年度以降は５%以下と減少している。

「目標・課題」については、全体的に 10%前後で推移しているが、2007 年から徐々に上昇し 2008 年度以降は 20%近くまで上昇している。

2)子どもの発達について（図 3-1b）

「子どもについて」では、「良い育ち」の割合が高く、中でも「異年齢関係」に着目が集まっている。「問題」では「子ども個人」の記述が多い。2005～2006 年度

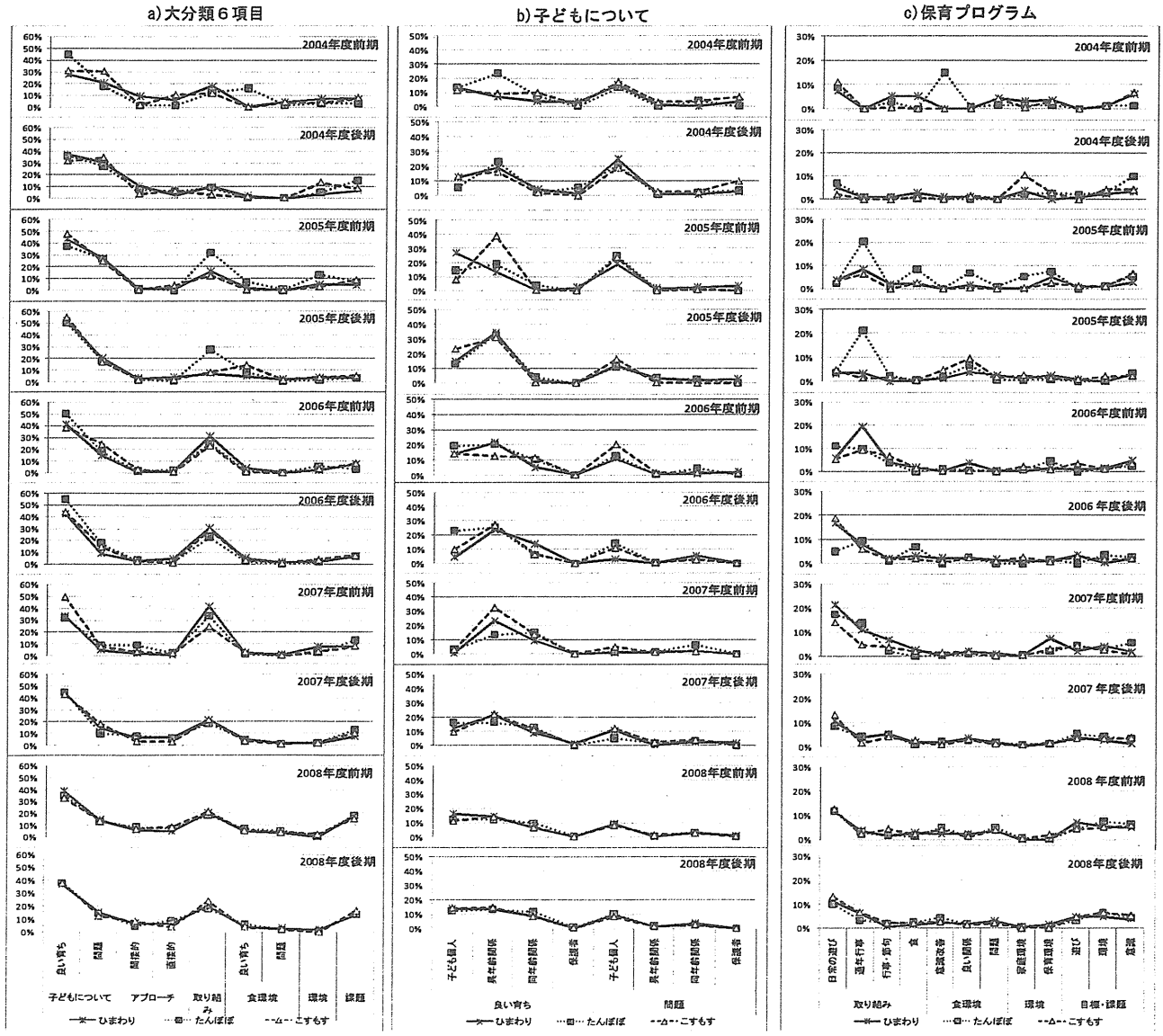


図 3-1.　年度別キーワード出現率

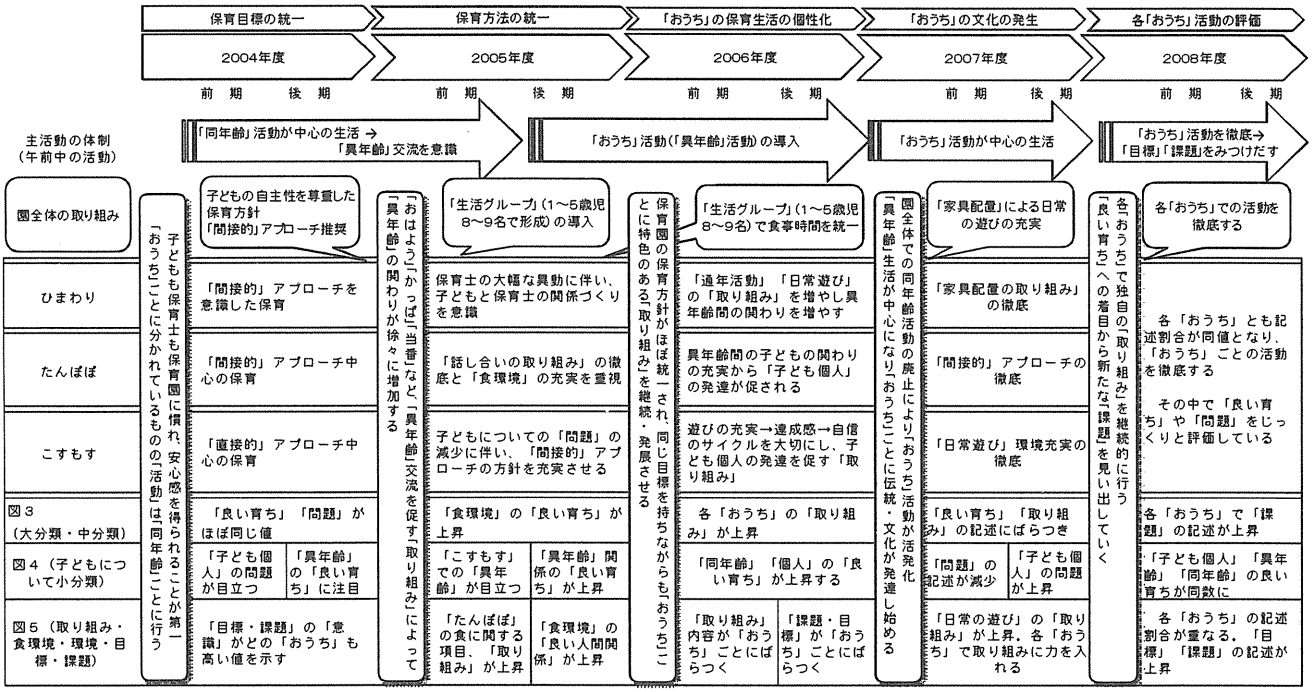


図 3-2. 保育方針の変遷

までは各「おうち」で記述割合にばらつきがみられ、おうちごとに記述内容に偏りがあることがわかる。

「良い育ち」については、2004 年度に「異年齢」での育ちに 20%と一定の値を示しているが、2005 年度前期は「こすもす」で「異年齢」39%、「ひまわり」で「個人」26.8%をと上昇する。2005 年度後期には、どの「おうち」も「異年齢」で 30%を超え、「個人」の値も前年度に比べ増加している。2006 年以降は「異年齢」が減少し「同年齢」での育ちが上昇している。2007 年度以降は「子ども個人」の発達に注目が集まり、「異年齢関係」「同年齢関係」とほぼ並んでいる。また、「問題」についても初年度から減少傾向にあった「子ども個人」の記述が 2007 年度以降再び上昇している。

3)保育プログラムについて (図 3-1c)

「保育プログラム」については、全体的に記述割合が低く横ばい状態であるが、前半で「たんぽぽ」の値が目立つ。後半では「取り組み」「目標・課題」の割合が各「おうち」で上昇している。

「取り組み」では、2005 年度「たんぽぽ」で「通年活動」として子ども同士の「話し合い」の場を設けたため約 20%を示している。その後「ひまわり」の「通年活動」の値が目立つものの、各「おうち」ごとに様々な「取り組み」の実施を経て、徐々に「日常の遊び」「通年行事」を充実させる取り組みに関心が移行している。

次に「食環境」については、「たんぽぽ」が 2004 年度前期に「意識改善」に注目しているが、各「おうち」で 2005～2006 年にかけて「人間関係」の記述割合が増加している。

「環境」については初年度に「こすもす」での「家庭環境」の記述、生活グループ導入による「たんぽぽ」の「保育環境」の記述が目立つが、2007 年度前期「ひまわり」の「保育環境」の着目を最後に減少した。

「目標・課題」については、2006 年度まで各「おうち」で保育士の保育「意識」の関心が高く、子どもへの「間接的」アプローチという園の保育方針を統一する過程が伺える。2006 年度後期からは各「おうち」で関心事項にばらつきが見られ、2007 年度以降はわずかに上昇傾向にある。項目も「遊び」「環境」などに広がりをみせている。

3.3 開設からの保育方針の変遷

図 3-2 は聞き取り調査によって開設からの保育方針の変遷を整理したものである。

1)開設

開設当初は、異年齢保育という保育方針がありながらも園全体での年齢別活動を重視する傾向にあったため各「おうち」での異年齢生活スタイルが確立できない状況にあった。また、総括資料で初年度の「アプローチ」方法の関心が高かったことからも、子どもへアプローチ方法を模索する期間となったことがうかがえる。

2)2005 年度

「おうち」内での子どもの生活時間を合わせるため、「おうち」別の活動を主軸とした保育プログラムへと移行し、「おうち」別の活動メニューを作成する。総括資料でも「取り組み」や子どもの異年齢での「良い育ち」の記述上昇が確認できる。また、「おうち」内での生活は約 25 名の子どもたちで構成されているため、少人数（8～9人）で食事をとるなどの「生活グループ」を導入した[注3)]。

3)2006年度

「生活グループ」の導入によって、異年齢での親密な関係づくりがすすむことで、同年齢同士の人間関係でも良い発達がみられるようになる。総括資料では2006年度から「同年齢」での良い育ちの記述が上昇し、「取り組み」内容にばらつきがみられる。「おうち」ごとに独自の活動を取り入れるようになり、生活時間や空間の活用方法も「おうち」別に個性が現れだす。

4)2007年度

「おうち」ごとの異年齢スタイルが確立されることで、「来年はあのお兄さん・お姉さんのようになりたい」など、子どもたちの間でも将来の見通しが持てるようになった。総括資料では「良い育ち」で「異年齢」の記述が減少し「個人」の記述が上昇する。

5)2008年度

「おうち」別の活動を徹底することで、新たな課題・目標が見えやすくなる。子ども個人の発達についても具体的な課題で話し合いができる。総括資料では、各「おうち」の値が重なり始める。「目標・課題」の記述で再び「意識」が上昇し、保育方法への関心が伺える。

6)保育園開設から5年間の動向

①園の保育目標の統一→②保育方法の統一→③各「おうち」に合った保育生活プログラムの作成→④各「おうち」独自の「取り組み」の強化→⑤「おうち」ごとの保育生活の個性化→⑥「異年齢」生活の強化による各「おうち」文化の発生→⑦活動の評価と課題の創出

4. 行動観察調査

4.1 行動観察調査の概要

「きょうだい保育」を行う3クラスのうち2クラス（「たんぽぽ」「こすもす」）を抽出し、各調査日の9時から16時まで[注4]の「おうち」内での全ての子どもの居場所を5分間隔で記録した。第3回調査は、年度初めの保育時間割り[注5]での行動を把握するため、補足調査として1クラスで実施した。

4.2 年齢別居室滞在率

図1-2のように、「おうち」内の居室を「居間」「食堂」「寝室」「着替え・玄関」「トイレ」に分類し、各「おうち」における5日間の平均居室滞在率を年齢別に考察する（図4-1）。

主な居場所は、「居間」「食堂」「寝室」であるが、各「おうち」で滞在率に特徴がみられる。

各「おうち」とも、「寝室」の滞在率が最も高く、「たんぽぽ」では50%、「こすもす」では40%であった。「居間」の滞在率は「たんぽぽ」で22%、「こすもす」では30%、「食堂」は両者とも20%程度である。

次に、年齢ごとの居場所をみると、「たんぽぽ」では、1～4歳児で「寝室」が50%、続いて「居間」「食堂」が20%であり、5歳児については5割が「居間」を占め、「寝室」の滞在は2割弱にとどまった。

「こすもす」では、1、2歳児で「寝室」の滞在が最も高く、「たんぽぽ」に比べて「居間」の滞在が1割程度と低い。3，4歳児は「居間」で30%、「寝室」が40%前後と「たんぽぽ」に比べ「居間」での滞在が高い事が特徴である。また、5歳児においては「居間」の滞在が65%と高く「寝室」の利用はほとんどない。

4.3 時間帯別子どもの居場所割合

「居間」「食堂」（台所を含む）、「寝室」、「着替え・玄関・トイレ」（以下「着替え[注6]」）、「その他」（屋外や遊戯室など「おうち」以外の場所）における、各調査日での子ども（各日の総園児数）の居場所を時間帯別（図4-2）に考察する。

主な生活の流れは、①自由遊び（各居室）、②1，2歳児：おやつ、4，5歳児：米とぎ（食堂）、③年齢別の集会（各居室）、④屋外活動、⑤昼食（食堂）、⑥午睡（寝室）、⑦おやつ（食堂）、⑧自由遊び（各居室）、⑨年齢別の集会（各居室）である。各調査日の保育時間割り[注7]を図4-3に示す。

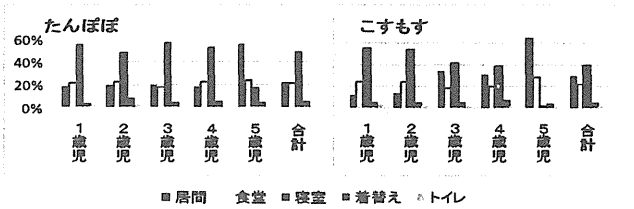


図4-1. 年齢別平均居室滞在率

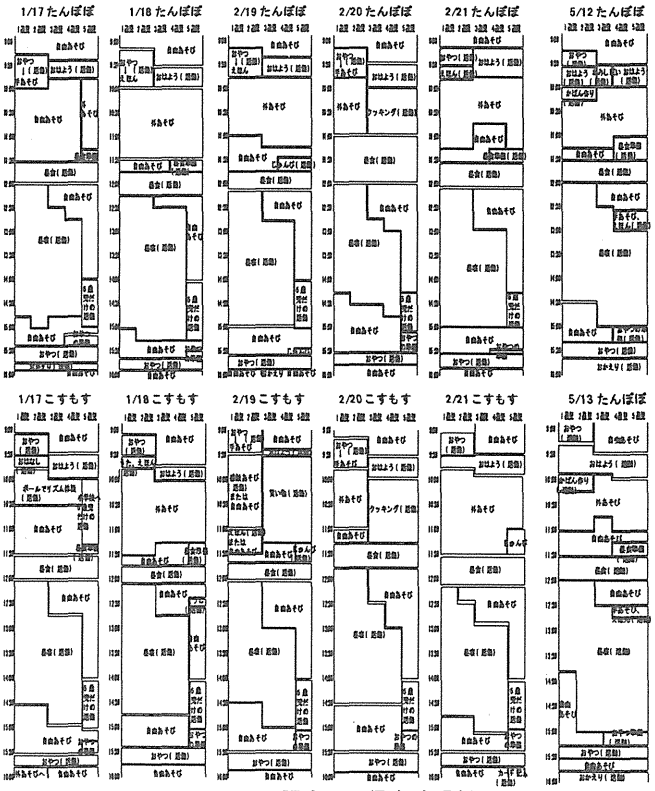


図4-3. 調査日別保育時間割り

各「おうち」とも、生活の流れに沿って居室の使い分けを行っており、居室利用の過程・バランスはほぼ同様のスタイルと言える。しかし、午前中の居室利用や、生活時間・活動内容による居室利用の時間帯にそれぞれ特徴がある。

1)居室の利用

「居間」の利用は、主に「遊び」の時間帯で多く、食事や午睡、保育士との活動時間の合間に「居間」での滞在がみられる。

「食堂」は、食事の時間帯での利用がほとんどで、滞在時間にメリハリがある。午前中の保育士との活動で利用される日もあるが、「食事」が済むと他室へ移動する子どもが多く「遊び」で利用されることはほとんどない。

「寝室」の利用は、主に「午睡」であるが、「午睡」以外の時間帯では「遊び」での利用が多い。「午睡」の直後は「食堂」同様、子どもたちも「遊び」の場としてはあまり利用しなかった。

「着替え」は、主に「屋外活動」「食事」「午睡」の前後に通過点として利用されるため、活動直後に少人数ずつで推移していく傾向がみられる。

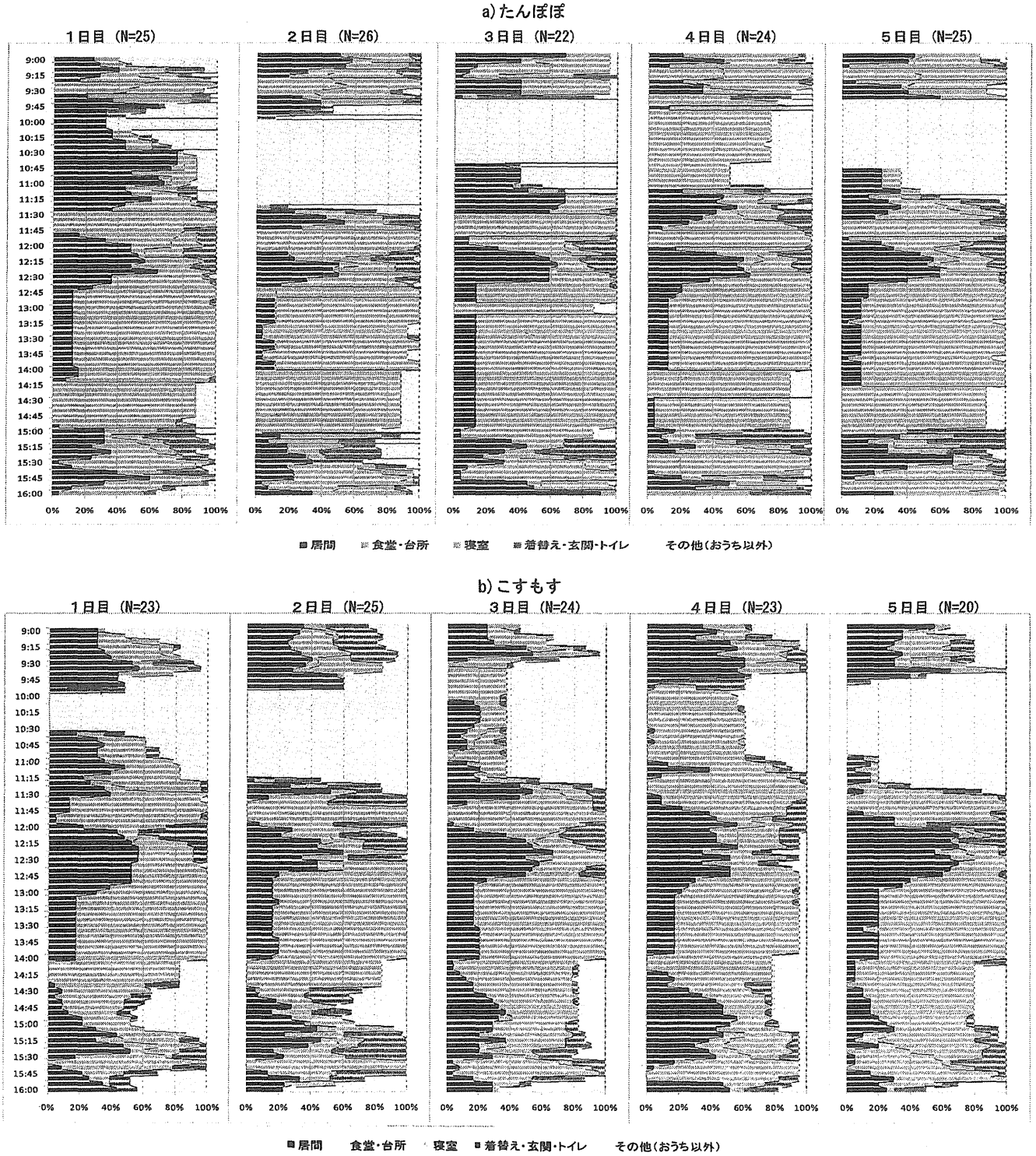


図 4-2. 時間帯別居室滞在率

2)「おうち」による違い

「たんぽぽ」では、調査日によって午前中の居室利用に違いがあり、「食事」の時間も各活動に合わせ日によって時間帯が異なる。「こすもす」に比べ、「午睡」以外での「寝室」滞在が高く、朝や夕方の「遊び」で利用される割合が高い。

「こすもす」でも「たんぽぽ」同様、午前中の居室利用に違いがある。「食事」はほぼ、毎日同じ時間帯に食べるようにしているが、「午睡」から起きるタイミングを子どもに委ねており、「午睡」前後に「居間」での滞在が高くなっていることが特徴的である。

4.4 滞在場所別集団構成

「居間」「食堂」「寝室」の３室における子どもの集団構成について、集団を「一人」「異年齢集団」「同年齢集団」に３分類し、「おうち」別に整理した。集団は、同じ机上で同じ行為を行う者、または会話する者を１グループとして（保育士は除く）５日分の集団数をカウントした。

1)集団の種類（図 4-4）

各「おうち」とも、「居間」での集団形成で「一人」が 40%強、「異年齢集団」「同年齢集団」が 25%前後と集団形態が多様であることがわかる。

「食堂」「寝室」では、「異年齢集団」の割合が高く、「食堂」で 50%、「寝室」で 60%を占める。「食堂」では「一人」の割合も高く 40%を超えた。

2)異年齢集団の規模（図 4-5）

集団規模を６種類に分類し、考察を行った。全体的に「こすもす」は「たんぽぽ」に比べ、集団規模が小さい傾向にある。また、各「おうち」とも「居間」に比べ、「食堂」「寝室」での集団規模が大きく、「居間」では多様な人数の集団が形成されている。「こすもす」では、「食堂」においても多様な人数の集団形成を確認できる。

3)同年齢集団の規模（図 4-6）

各「おうち」とも、同年齢の子どもの人数が３～６名のため、集団規模を５段階で分類し考察を行った。異年齢集団に比べると集団規模は小さく、２～３名の集団が多くみられる。

集団規模については、「たんぽぽ」で２～３名の集団が多く、「居間」では３名、「食堂」「寝室」では２名

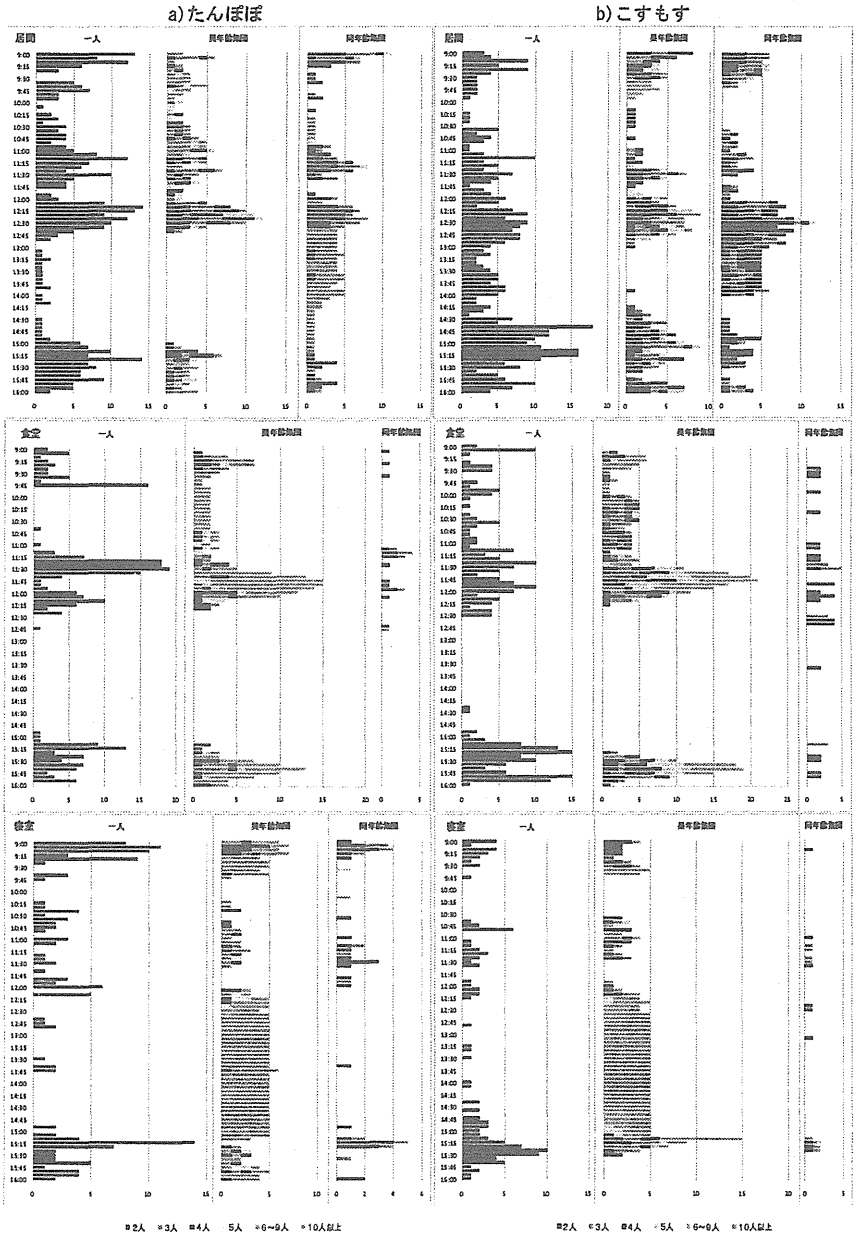


図 4-7. 時間帯別集団数

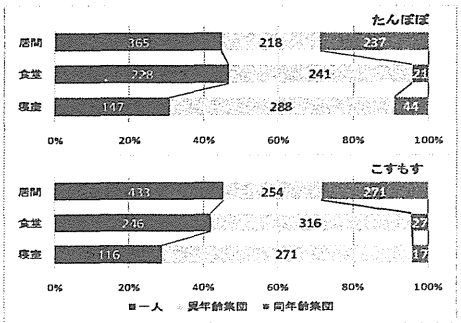


図 4-4. 居室別集団構成割合

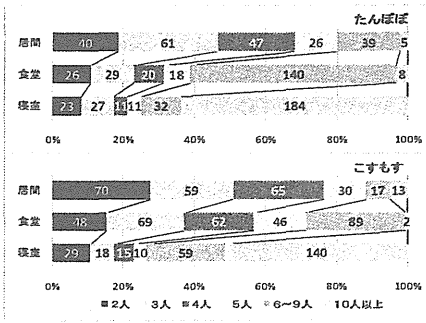


図 4-5. 異年齢集団人数構成割合

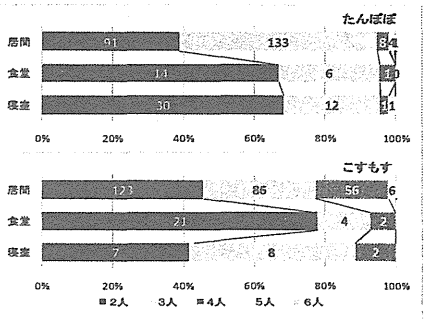


図 4-6. 同年齢集団人数構成割合

の集団が半数を上回った。

「こすもす」では、「居間」における 2 名集団が 45%、3名が 30%、4名が 20%と「たんぽぽ」に比べ、4名集団が目立つ。「食堂」では、2名集団が 80%弱と圧倒的に多いが、同年齢では「たんぽぽ」に比べ、集団規模が大きい傾向にある。

4.5 時間帯別集団構成（図 4-7）

集団の種類と規模を居室別に時間帯別に示したのが図 4-7 である。「居間」では、各活動の前後に「一人」でいる者が目立つ。特に「こすもす」は、「午睡」の時間帯が日によって変わるため、15 時前後の割合が高くなっている。「たんぽぽ」では、「異年齢集団」の割合が「昼食」前後で高く、特に「昼食」後から「午睡」までの間で多様な集団が形成されている。「同年齢集団」は、「朝」の自由遊び時と「昼食」前後に多くみられ、「午睡」時はほぼ3名での集団となっている。これは、5歳児が3名とも女子であることに起因すると推察される。

「こすもす」では、「朝」「昼食」後、「午睡」後で「異年齢集団」が多く形成されている。「同年齢集団」は、「朝」「昼食」後で多く、特に「昼食」後は「2名」の集団を中心に多くの集団が確認できる。

「食堂」では、各「おうち」とも「食事」時間での「異年齢集団」が圧倒的に多く、「たんぽぽ」では大規模集団、「こすもす」では多様な集団構成が目立つ。「同年齢集団」はどちらも少なく、小規模である。また、午前中の活動時には、「たんぽぽ」で6～9名の集団、「こすもす」では3名の集団で利用している。

「寝室」は「午睡」時に 10 名以上で利用されることがほとんどである。「たんぽぽ」では3，4，5歳児 10 名以上で朝の集会時にも利用される。また、「こすもす」に比べ「同年齢集団」での利用率が高く、「朝」や「食事」前後の「遊び」の時間で小規模集団が確認できる。

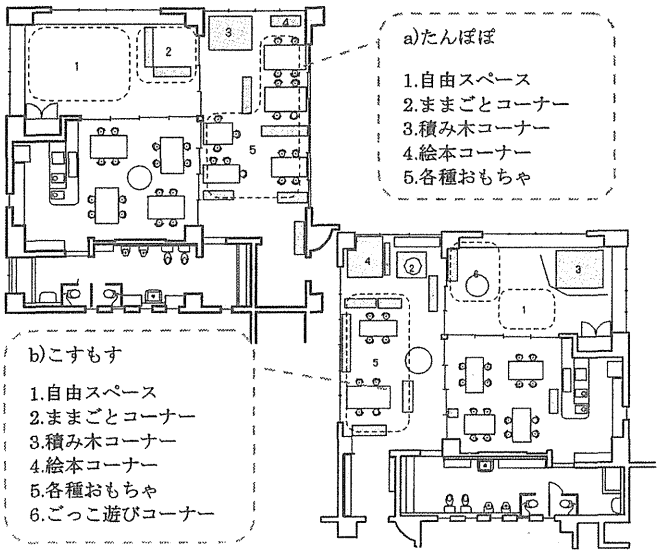


図 5-1. 各「おうち」内の遊び場

5. 行為別集団構成

5.1 行為の分類

「おうち」内での子どもの行為は、自由な「遊び」と「食事」「午睡」「着替え」「トイレ」などの生活行為、さらに保育士主導で行われる朝夕の集会（15分程度）や年齢に応じたプログラム活動（感触遊びやクッキング保育など）などの「保育活動」、食事前後の「手伝い」などである。それらを大きく「遊び」と「活動」の2種類に分類し、それぞれにおけるグループ数をカウントした。「活動」は、生活行為、保育活動、手伝いなどで、「遊び」も「活動」も行わない者（ボーっとしている、うろうろしているなど）は対象に含まなかった。

室内での自由遊びの時間は、一日にのべ2時間程度である。居間には、4～6人掛けの机が3脚程度、じゅうたん敷きのままごと（または積み木）コーナーが準備されている。寝室は、畳敷きのオープンスペースとなっており、ままごと（または積み木）コーナーが隅に準備されている。「たんぽぽ」「こすもす」の主な遊び場を図 5-1 に示す。

5.2 行為と居場所の関係

調査対象とした行為数（行為を行うグループ数）は各「おうち」5日分で、「たんぽぽ」のべ 1712 事例、「こすもす」のべ 2081 事例であり、これらの事例において分析を行った。

全体では「遊び」が 40%、「活動」は 60%と「活動」が「遊び」を上回っている（図 5-2）。「たんぽぽ」に比べ「こすもす」の方が、「遊び」行為の割合が若干高く、各行為における居室利用のバランスは、各「おうち」でほぼ同じ割合となっている。

「遊び」では、80%が「居間」で行われ、「寝室」で 20%弱であり、「食堂」「着替え」（トイレを含む）はほとんど利用されていない。

「活動」は、「居間」以外の3室で行われる割合が高いが、「食堂」で 40%、「着替え」で 40%弱、「寝室」で 20%程度となっている。「たんぽぽ」で「着替え」、「こすもす」で「食堂」の利用がそれぞれ多くみられる。

5.3 居室別集団構成（図 5-3）

「遊び」では、各「おうち」とも「居間」と「寝室」で「一人」「異年齢」「同年齢」集団がみられる。

「活動」では、「食堂」で「一人」及び「異年齢」の集団、「寝室」では「異年齢集団」、「着替え」では「一人」が多く、「同年齢集団」が少ない。

「遊び」での集団割合をみると、各「おうち」とも「居間」で各集団が 30～40%ずつみられる。「たんぽぽ」ではその他3室で「異年齢」の集団が 40～50%を

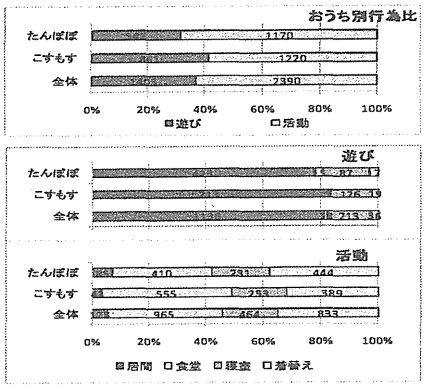


図 5-2.　「おうち」別行為場所

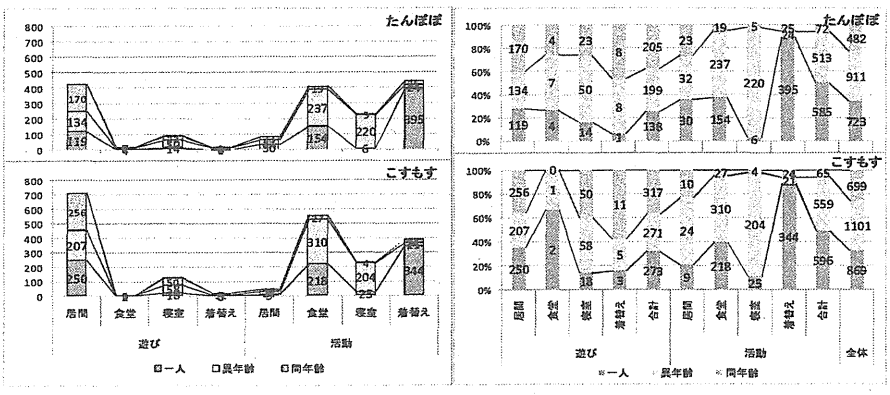
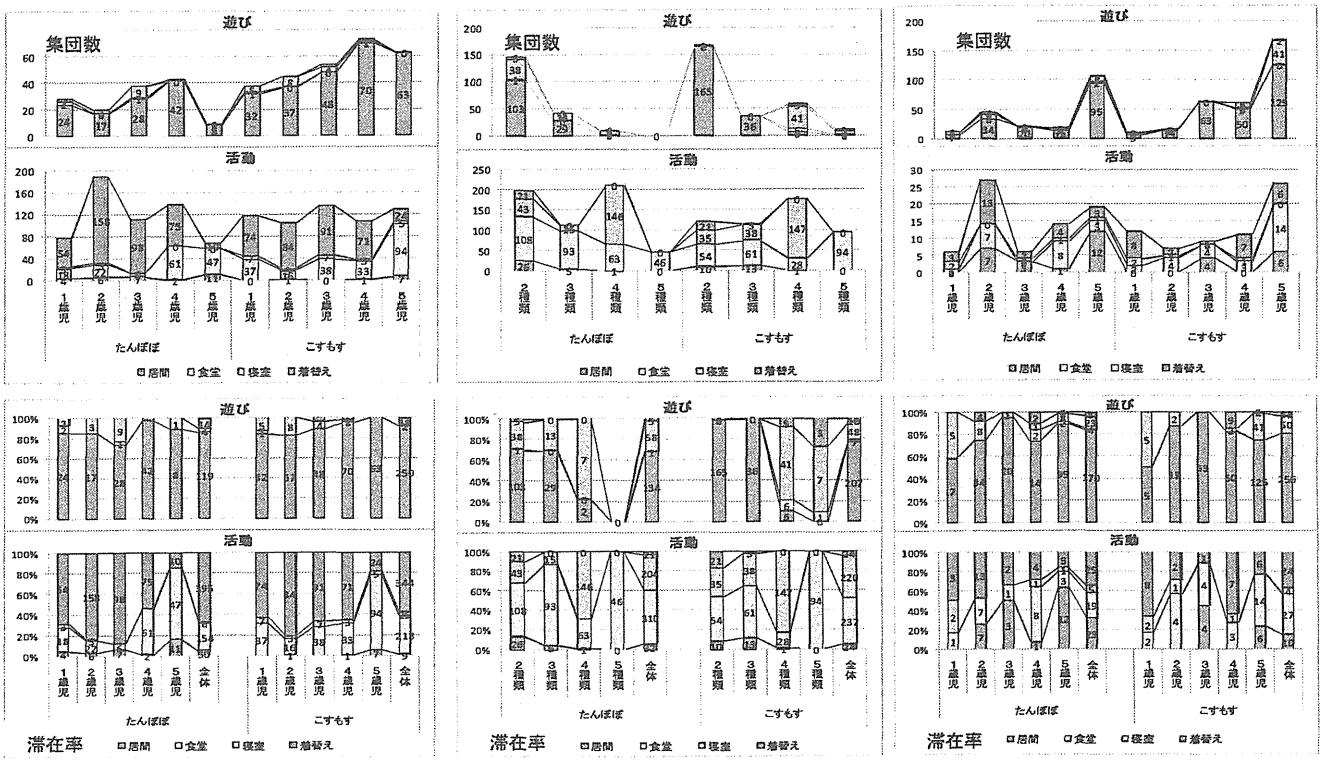


図 5-3.　居室別集団構成割合



a)一人でいる者　　b)異年齢集団の年齢種類数　　c)年齢別同年齢集団

図 5-4.　行為別居室滞在率

占め、「着替え」では「同年齢」集団の割合が 40%と比較的高い。「こすもす」では比較的「同年齢」が高いが、「食堂」での「同年齢」集団はみられなかった。

「活動」では、各「おうち」で集団のバランスがほぼ同じである。「居間」では「異年齢」集団の割合が比較的高く、「たんぽぽ」で 40%、「こすもす」で 60%を占める。「食堂」では、「異年齢」50%、「一人」40%、「寝室」では「異年齢」90%、「着替え」では「一人」が 90%と高くなった。

5.4　年齢構成

1)一人で過ごす者（図 5-4a)

「遊び」では、全体的に年齢が上がるほど「一人」で遊ぶ傾向が強いといえる。「たんぽぽ」の５歳児は「一人」で過ごす人数が少ないことが特徴的である。「たんぽぽ」に比べ、「こすもす」では「遊び」での「一人」が多い。「活動」では、「たんぽぽ」で１，５歳児が少なく、２歳児が多い。「こすもす」では年齢による違いほぼみられなかった。

「滞在率」については、「遊び」で「居間」が 80%程度と高い。１，２，３歳児については 10～20%が「寝室」を利用しており、これは各「おうち」で共通している。「活動」では、全体的に「食堂」が 40%、「着替え」が 60%を占めるが、各「おうち」ごとに年齢での特徴がみられる。

「たんぽぽ」では、１～３歳児で「着替え」での割合が高く、２，３歳児で 80～90%となっている。１歳児は、「食堂」の割合が増え 20%、「着替え」が 70%にとどまる。４，５歳児では「食堂」の割合が大幅に増加し、４歳児で 50%弱、５歳児で 60%を占める。これは「手伝い」に起因すると考えられる。

「こすもす」でも同様の傾向がみられるが、１，３歳児の「食堂」の割合が比較的高く、４歳児と同じ値である事が特徴的である。

2)異年齢集団（図 5-4b）

異年齢集団の種類を、集団に含まれる年齢の種類数によって４分類し、考察を行った。「遊び」では２年代にわたる異年齢集団数が多く、５種類の年齢構成はほとんどみられない。「活動」では幅広い年齢構成の集団で構成されていることが確認できる。

各集団における居室滞在率をみると、「遊び」では、年齢種類数が多いほど「寝室」の利用率が高く、様々な年齢の子どもが交流していると考えられる。

「たんぽぽ」では、２～３種類の年齢で遊ぶ場合に「居間」70%、「寝室」30%であるのに対し、「こすもす」では全てで「居間」の利用となっている。種類数が増えると各「おうち」で「寝室」が 70～80%と増加し、「こすもす」では「着替え」の利用が 10～20%に増える。

「活動」では、主に「寝室」「食堂」での滞在率が高く、種類数が少ないほど「居間」「着替え」の割合が増加する傾向にある。４種類の年齢構成では「寝室」の滞在率が 70～80%と高いが、５年代全てが集まるのは「食堂」のみであることがわかる。これらの傾向は各「おうち」ともに共通する。

3)年齢の組み合わせ（図 5-5）

異年齢集団における年齢の構成を「年の差」によって３分類し考察を行った。年齢の組み合わせは、年齢の近い者同士での集団数が多く、「遊び」「活動」ともに同様の傾向がみられる。

「たんぽぽ」では、「遊び」で「３，４歳集団」を作ることが多く「居間」「寝室」での割合が高くなっている。また、年の差のひらいた集団での「遊び」も若干みられ、３歳児、４歳児との組み合わせが多い。

「こすもす」では、「１，２歳集団」「３，４歳集団」「４，５歳集団」が多く、３年代での集団もこれらの年齢を含んで成立している。「年の差集団」は「たんぽぽ」同様に、３歳児と４歳児との組み合わせが目立つ。

「活動」では、１歳差集団がほとんどで、朝夕の集会や午睡の時間などに影響されていると考えられる。

4)同年齢集団（図 5-4c）

同年齢集団は、「遊び」で５歳児が圧倒的に多く、各「おうち」で共通している。「こすもす」では、２，３歳児の集団もみられる。「活動」では、「たんぽぽ」の２歳児の多さが特徴的だが、「こすもす」では５歳児の多さが目立つ。

居室滞在率では、「遊び」における「居間」の割合が高く、低年齢での「寝室」の利用も目立つ。これは各「おうち」で共通しており、１歳児は「居間」「寝室」で集団を形成している。

「活動」では、全体的傾向は各「おうち」でほぼ共通しているが、年齢別に特徴が現れている。「たんぽぽ」では、概ね年齢が上がるごとに「居間」の割合が上昇し「着替え」の割合が減少する。４歳児は「食堂」の割合が高く、１歳児は「寝室」の割合が高い。

「こすもす」では、１，４歳児で同様の傾向があり、「着替え」の割合が 60%、「食堂」が 20～30%となっている。２，５歳児では「食堂」の割合が高く、５歳児は「居室」の利用もみられる。３歳児は「居室」「食堂」で各 40%となっている。

6. アンケート調査

6.1 アンケートの概要

保護者を対象に、子どもの家庭での食事に関するアンケート調査を実施した。アンケートの項目は「生活時間」「家族構成」「食事時間」「食事内容」「家庭での手伝い」などで、配布概要を図 6-1 に示す。紙面の都合上、「家族構成」及び「家庭での手伝い」に関する項目について整理、分析を行う。

6.2 家庭での食に関する意識

2008 年の調査をもとに、図 6-2a)～c)について「年齢」「おうち」「家族構成人数」の３指標を用いて分析を行った[注8)]。

「給食に関する会話の有無」では、２歳児の意識が高く、その他はわずかながら年齢が上がるにつれて意識が

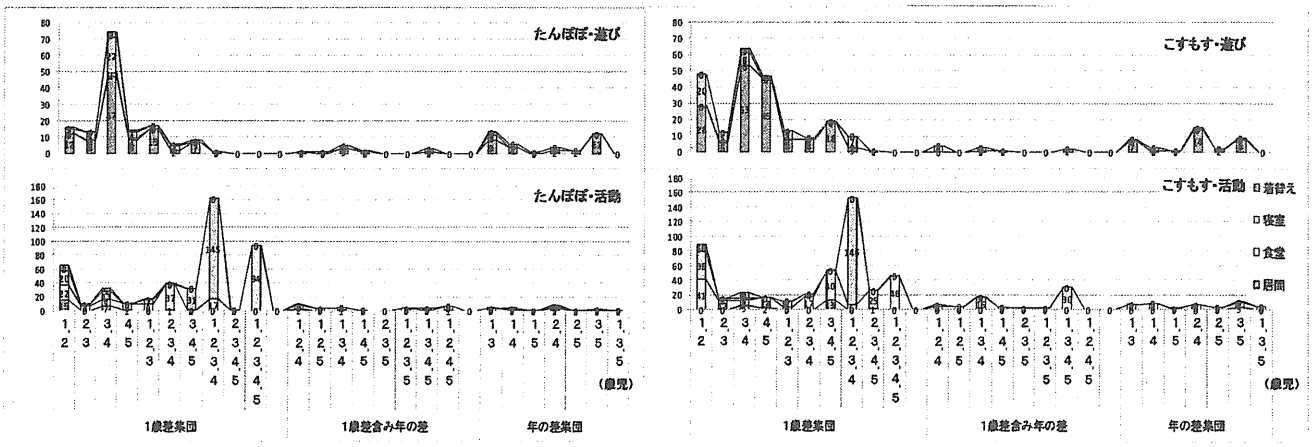


図 5-5. 異年齢集団における年齢の組み合わせ

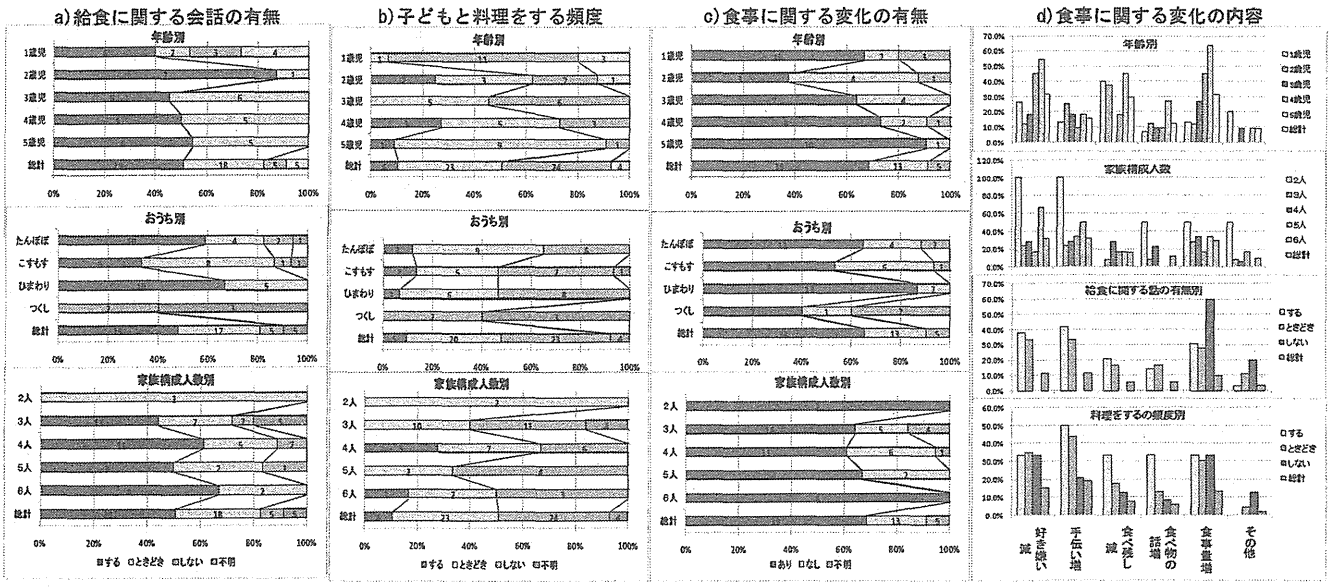


図 6-2.　家庭での食に関する意識

	たんぽぽ	こすもす	ひまわり	つくし(0歳)	合計	回収	有効回収率
2008年調査	26	25	27	8	86	57	66.3%
2009年調査	24	26	25	8	83	59	71.1%

図 6-1.　アンケート調査回収率

高くなる傾向にある。「おうち」では比較的「ひまわり」での意識が高い。「家族構成人数」では人数の違いによる傾向の違いは現れなかった。

「子どもと料理をする頻度」では、「会話」の傾向と同じく２歳児の意識が高く、「ときどき」する者を含めると、年齢が上がる程意識が高まる傾向にある。また、全体的に約半数の子どもが家庭でも料理の手伝いをすることが把握できる。しかし、「おうち」「家族構成人数」による顕著な違いはみられなかった。

「食事に関する変化の有無」では、２歳児の変化が40%と他に比べ低くなるが、その他は年齢が上がるごとに高くなっている。「おうち」では、「会話」同様、「ひまわり」「たんぽぽ」が「こすもす」に比べ高い。「家族構成人数」による違いは、「２人」「６人」で高くなっている。

「食事に関する変化内容」については、「好き嫌い」「食べ物の話」「食事量」についての良い変化が年齢が上がるごとに高くなっている。「家族構成人数」では、「２人」を除き、人数が増えるごとに「手伝い」が高くなっている。「給食に関する会話」及び「料理をする頻度」では、頻度の高い者ほど値が高くなる傾向がみられた。ただし、「食事量」の増加については相関関係がみられなかった。

6.3　家庭での手伝い頻度（図 6-3、6-4）

2009 年の調査をもとに、家庭での「料理をする頻度」「手伝いをする頻度」[注9)] について考察を行った。

全体的に「料理」に比べ「手伝い」の頻度が高く、「ときどき」行う割合が増加している。

全体的に「よく」する者が少なく、「たまに」の割合が高くなっている。

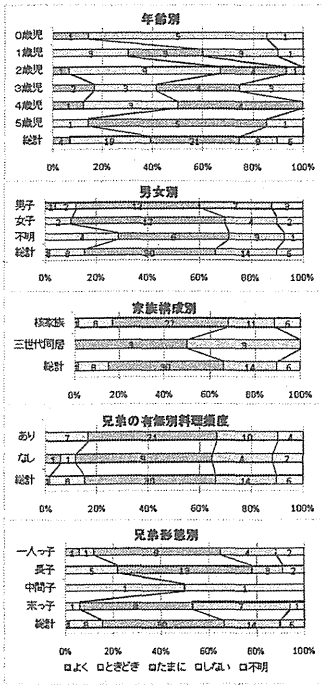


図 6-3.　料理をする頻度

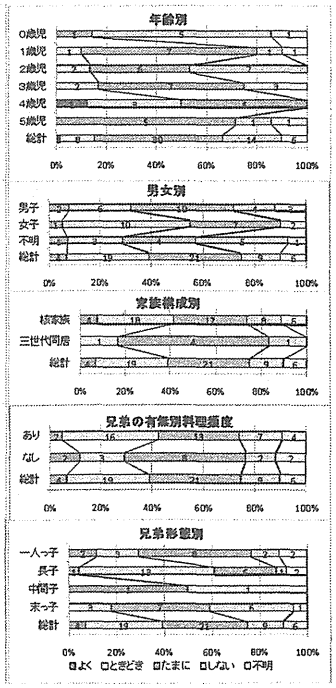


図 6-4.　手伝いをする頻度

「料理をする頻度」では、「たまに」までを含めると年齢による違いは少ない。しかし「ときどき」においては、2009 年においても２歳児の値が高くなっており、その他の年齢では、年齢が上がるごとに頻度が低くなっている。「男女」では比較的「男子」の頻度が高く、「家族構成」では、「核家族」での頻度が高くなっている。「兄弟の有無」ではあまり差がみられないが、「兄弟構成」では、比較的「末っ子」で低くなっている。

「手伝い」については、５歳児で「たまに」の値が高く、その他の年齢では「ときどき」行う者で年齢に応じて高くなる傾向にある。特に４歳児は「よく」の割合が高い点が特徴である。「男女」では、比較的「女子」で高くなっている。「家族構成」では、こちらも「核家族」での割合が高いが、「たまに」する者は「三世代同居」で高くなっている。「兄弟」についてはこちらも、

「兄弟構成」で違いが現れており、「末っ子」で低くなっている。

7. まとめ

以上、K保育園における子どもの生活実態について考察し、集団形成の種類、またその意味によって分析を行った、以下に、主な結論を示す。

①機能分離性の高い「いえ型保育空間」を生かし、「きょうだい保育」を行う上で重要なことは、各「おうち」ごとに生活スタイルを確立することである。また、10 名以上の大集団での生活よりも、各年齢１～２名ずつで構成される９名以下の小規模集団で、より親密な異年齢交流が生まれる。さらに、異年齢交流を経験することは、各年齢に応じた発達を促すと推察できる。

②「おうち」内での主な居場所は、「寝室」であり、年齢が上がるにつれ「居間」滞在率が高くなる傾向にある。５歳児については、「午睡」をしないため「居間」の滞在率が最も高い。

③各「おうち」で日ごとに居室の利用率は若干異なるが、概ね生活時間に合わせて居室別に滞在率が変化する。「居間」は、「活動」の合間の遊び時間・自由時間で自由に利用される性格であるのに対し、「食堂」は「食事」時間のみで利用され滞在時間にメリハリがある。また、「寝室」は「午睡」時に布団を敷く以外は「遊び」や「活動」時で利用され、場所的性格に若干の自由度がある。

④「集団構成」は、概ね「一人」が 35%、「異年齢」50%、「同年齢」15%であり、「居間」で形成される異年齢集団の規模は比較的２～４名と小規模であるのに対し、「食堂」「寝室」では５名以上の割合が高い。

⑤行為別に集団形成を分析した結果、「遊び」での集団構成は「一人」「異年齢」「同年齢」と各集団がほぼ同じ割合で形成されるのに対し、「活動」では「同年齢」集団がほとんどみられず、「異年齢」集団の割合が高い。

⑥「遊び」では、「居間」の滞在率が高く、年齢が上がるごとに「一人」「同年齢」集団を好む傾向がある。また「遊び」で「異年齢」集団を形成する場合、年齢の近い者同士で形成される場合が多く、年齢発達に応じて遊びの嗜好が異なる事が推察できる。

⑦「活動」では、幅広い年齢層での「異年齢」集団が形成され、特に「食堂」でその割合が高い事から１日の生活での５年齢間交流は「食事」の時間がほとんどであることがわかる。

⑧子どもの家庭での生活については、主に年齢によって傾向がわかれるといえる。２歳児は家庭での給食の「話」「料理」をする割合が顕著に高い。しかしながら、食事に関する良い変化については、年齢が上がるごと多く現れる傾向があり、２歳児でのそれは低い割合を示した。これは、クッキング保育を３歳児から行うことに対する憧れであると推察でき、料理への興味は高いが、実際に変化が現れるのは、料理を園で経験している高年齢の子どもであることがわかる。

＜注＞

1) 参考文献「きょうだい保育の園舎づくり」参照。
2) 図 4-3 にあるように、５月のたんぽぽでの保育時間割はほぼ１，２月と同じである。年度初めと年度末では、５歳児が午睡をする点と朝の集会を３歳児、４，５歳児で分かれて行う点で違いがみられる。しかし、「おうち」別での結果と同様に年度の違いでも集団構成が変化することが確認できた。そのため、本稿では主として「おうち」別の比較分析を進め、年度別の分析は紙面の都合上省いた。ただし、集団構成については、１歳児の同年齢集団数が増え、５歳児の同年齢集団が減少しており、「午睡」の形態変化によるもの、また５歳児の性別構成が「女子のみ」から「男女混合」へと移ったことに起因すると考えられる。また、基本的に園児は入園から卒園まで同じ「おうち」で生活を送るが、保育士は毎年交代制をとっている。そのため、年度ごとでも「おうち」別と同様の違いがみられると考えられる。
3) 「生活グループ」とは、食事などの生活時間を共にする８～９名の小集団を意味する。１グループは１～５歳児各１，２名ずつで構成され、25 名での団体行動時よりも８～９名での小集団行動時における異年齢の交流が促進された。2005 年度は前期に「生活グループ」を導入したものの、午前中の活動が年齢別活動中心であったため、１～５歳児で昼食をとる時間を合わせにくかった。昼食時間は１，２歳児と３～５歳児に分かれる場合が多く、後期には活動時間を調整し、１～５歳児での昼食時間が増加した。
4) ほぼ登園が完了する９時から保護者の迎えが始まる 16 時までの７時間を調査時間とした。
5) 年度初めは１～５歳児とも午睡をするが、卒園にむけて徐々に５歳児は午睡をとらずに自由遊びの時間へ移行する。
6) 「着替え」「玄関」「トイレ」での集団数が少ないため、これらをまとめ「着替え」とした。
7) 各「おうち」ごとに生活プログラムを組むため、食事、午睡、自由遊び時間などに若干の違いがある。また、各調査日ごとに生活時間にも違いがある。
8) 「つくし」は０歳児用の「おうち」である。家族構成について「２人」家族は母数が極めて少ない。
9) 「手伝い」は「箸を並べる」「ご飯をよそう」など、保育園で毎日行う活動と同じ内容について質問した。

＜参考文献＞

・全国保育団体連絡会・保育研究所編：保育白書，ちいさいなかま社，2007.8
・東京・こぐま保育園：きょうだい保育の園舎づくり，草土文化，2002.2
・山田恵美他：幼保一体型施設における活動の分布と規模変化に関する研究，日本建築学会計画性論文集 vol.74 No.638，2009.4
・山田恵美他：自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの方に関する研究，日本建築学会計画性論文集 vol.74 No.637，2009.3
・細谷俊子他：異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究，日本建築学会計画性論文集 vol.73 No.634，2008.12